法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

歌舞髄脳記

音曲和集

能楽研究所
2843

アイウエヲ　奥ト喉ニ通ス
カキクケコ　歯ニ通ス
サシスセソ　歯ト舌トニ通ス
タチツテト　腭ニ通ス
ナニヌネノ　奥ト腭トニ通ス
ハヒフヘホ　唇不合之
マミムメモ　唇合之

能楽研究所

ヤ井ユヱヨ　鼻ヨリ出ル

ラリルレロ　舌ヲフル

ワ井ウヱヲ　鼻ト喉ニ通ス

歯ト歯ヲ歯ヲ舌ヲ口ヲ入ル

歯ト唇ト唇ト口ヲ出シ口ヲ閉ホム

歯ト唇トニフクル歯ニツク

一　三ノ口ノ事　第一ハやまとことばの上
のんとよくもちたる也　始ハ上ヘ付クニツ
同前ル三ツ同前也

一　うけくへノ事　文人里とやかやくむ
けつ本の花の上肉つくひす文始のをを
わきんのこと　めは上中下ノ海同前へ
もりすゝ長く〳〵そ文三ツの口ト言ふも

有化混沌清中故ニ入りめノ上之

一 二字つめト云事 えころとかさめや

一 序始ノ事 上 うつ波や浪の音落ハ 始の二字

ろ〳〵

一 三句トニ云事 はるのひかりもあまてる

一 三字ありト云事 以外二帖ノ字ツかくかへ河ニ付テ也 うら路そうつろこあは

かい飛也云りかりえ

一 三字かゝりノ事 花見るあふるかゝり

一 二字共ニ たちひかれ吉紀まよく

一 一字共ニ 出ひかりもと出り

一 字かゝりノ事 うへかゝるくるまとかゝる

一 かゝり 花見るあふ 常ノ体そつらす

一 文字ノ事 遠ト云事 見てぬ みぬ

うせね　うせね　出しね　出しね　んね
んえね
一　菊とも云す　末ありしも錦も菊なを
花もちり　文字ゆるしをもそしろし
錦とも菊の名をと　そろし
一　文字あつかふト云す　たそハありけりむさし
野をもけるしは花を　き別字なし

ゆかりねやうらひて文字にあつかひとも
もくるね裏とハうたしとるひけとハ
花のことひ異なるハこととて文字とあるハ
とのくろさすハうつく大方の梅ハ大にそれ
梅のうくひくさ梅ハひきくそわしくよんをり
てくるは一色紙ふト云りたるハ
雲井のたちとをきのひさそ　くらけり

あおうとかへ　天よ来めに塔よひく
うへのるおて　よ一洞ト宮聲あり
かりあり　天よめの稀つくハ　なり事也
かり吉五よ一段之事節もへまや
言曲ゐてた竹のしくなり
三ツ云　もくにさうくてやもくおれしとら
一 文字ゟ章にうすり。　古今の曲のいろくそや

りしめくそ　飛滑くくそ
一 章を字にうすり　かつそう女よりて
一 らす　ゆ女の人まゆらく全は
おりそて　一字してまカツ入之うりトの
らくりまし。
一 ろくりノ事　たい三の中う此ふかる
ひ母の柳のみとりも
一 .

一 くり上ハ打物カと入る也 如此ノ時ハ
一字くカシ入静シ出る也
一 入ると云事 文字ざらすまさやうに入也
花よりみちよ情常のめぐさ也 其ハ一字入也
又二字三字の二のさんくかひろめて
なす也 又一字ニクルト付タル所アリ
一 ゆりと云事 其ハクリノユリ也 打ハセツト云也

時ハ一口二打〇三口ハめぐさ 又常ハ三打〇二口めぐさある也
一 半ゆり うめりけつ心ろ 又其頭の
行とをもつとや 心よまる也
一 声ノゆりの次ニ一字語モテノ事ニ古付ル
・何ニ二ツメハ声ツ出すへし 又和ノゆりハ
音おろす也 其の八拍子ノ所ニ打番之有ル大
一 ひろふと云事 又くる毎よろのかけてやに

はね字ともあしひらなと二字ひろひて
一わきすニ云ハえ文くろきまゝやうに思ふ
一よすかハ見しゆ竹馬よむちとちから小ちまい
矢のもとすゑをもまきぬるもの
一そこふト云葉そうしとしてふう声しいるの
濁事ノ成と
一きうりト云ハふひとにありきりてふかり

哥云まり拍子こゝろす拍子に皆ふふ
ふうにしめまりとこ濁やそこ三呼
一入ヒト云ハ中リ見奥ノハツル所ゝきこゆひやう
仲ノ所もおくすゝくト為ニ中んそこ拍二
一息濁すゑすゑく二声まゐやう濁へしてふを
そえ濁へし文字くまぬやうニ濁へし
一白めひト云ハ名めく明めの出ス謡ノ曲句ニ切

息大事也ツグ息ニテ短ク捨テ候ト云也
字ツリ息ニテ云出スト云リ詞ノ内ニ大ツ
習有事也ゆるくトゆるく〳〵云ニシ呼
吸ノ息トモ云ヒ切處ノ息ツ貫ぬき出シ云也
息ツ肺ヘ入ニ入ルト云リ能合点有事也カタシ

一 詞語ノ事ノ詞ノ習ハゆる〳〵と清ルへし句ねらひ
外ニ右ニ記ス事ニ有リすこしもかはりて

あまりこはくニかりてハ一字つけて清ル
声破ゑノ稽古事也ソシ一字かゝると云
事云
詞遣ふ風もくやうて大事なり
うきふしのこゑひての

一 句のひゞきと云ハ ゆる〳〵と云て
秋の来(え)すゝ(つ)いにさるのひ柏子りそく
出もちうすをもわくらくと云文字也

と云ハ宮女ノこゝろ〳〵ニ文陵のあたりと
こゝろ之庭ノ名シるへし野之

一 脇ト云テノ謡ハ 脇ノ方ハあしく脇ツ
云ての方ハうるハしくのひくトうたふへし
さありとてうるハしくのひてあしかるへし

一 謡ハよシ打鼓ノ心ハ平生ニつくやかし
心を付へしよシ打ハ鼓ヲ打時ノ心持ハ拍子

次をいふへきなし

声云ハうろうの鼓を打ハ和あそ
声よりへき地を心得よ

一 太鼓ニ云ノ打ノ花ノみ急迄ニあり口傳

一 鼓ノ口傳

一 太鼓ノ秘事 太ノ三ハ書載かたし口傳也

一 曲舞ヲうたふにハ文字ノ位ヲゆるくドうたひて後ノ

位ツくるくつめてうたふト云ハ作曲第二
ミてつす拍子おさへのつめひききこえ之
一 あひの詞ト云の拍子ツくてこけりくぬる
りうゑ　此説之
一 はじめ字のまへ詞ツおさへ出して云也
はじめて詞ノ字へうつりうつり　はかにこく
云節の下ハ上ニハす　又ハ拍子別ニのこり

此説ノ事也
一 あて拍子ト云ハ八語ニ付まえてもひ。子の
りのけ　うらふに　めんふふトあとる
あすき　あらしりくるとかてゐお
もーろく文字ニさりす あすつに
めり海りきまし　文字書き渉あに
まへの所くらふト云すあり。

一口もいも切りのあり。はさてしら給なり　あれ
并しつとを

一口ノ切心ハ切ストきすの　文あり時の声を恋
一んハ切口ノ切サルの　めあるあるの渡称あつて
ぱ沖まそて候へまの

一待ト云ハ　あの灯をけ候とる灯と消ては
よの字ニ柳子シつくる　といけきん〜や

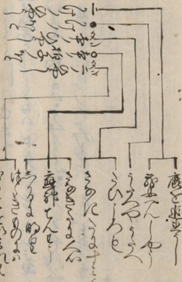
こきんしやれくあの字ニ柳子シつくる
紫苑一枝　ヤトシ清めの字ニ柳子シ付ル

一腰立するハ　我シ捨テ人ニ渡して内ニ為
耳ニ入る子ト也り文人の息ノ流る机やうに
んシ亀へし続る字シ腰トイへり

一けノ柳子ト云ハ　亡徳ノくるめノトニ當ル　鹿も
出来るしハ　前母言殿と字町の出来之同

うけの絃ちうつゝト云の うへやうゑうかこ
それハ二ト弦トノ昌ちり、女常ノ声之
一本ノ柱子ト云ハ二たんノたんへ面れ 揺ゐする
くうくの文 ゆるにてすまうふしるた
墨の うかニあめり字ハ本より 同
本ノ絃ト云ハ ゆるにてくんふうて
引かに明るし 無弦もん上の内へ

しこま 出来く
一二ノ調しと云の ト夕ニ夕ンノ夕ンニ歯は
はゝき物よりうとすふ、おもひそ紛ず
せうそおもいてみ甚の そ直ス声ト
云こ



一 中音下の羽ノ位之羽ノ位ノ二字ヲ以て之
　指ハ山　花さくは一色ありて之をすこし
　山徴ノ位ツモ云ふあり
一 下音下云の角ノ位之謂ニ字をに
　蘭りてある之　取のこころの[illegible]あり
一 安音と云ハ　祝言　幽玄　恋慕　哀傷
　乱曲さめ之　乱曲の闌曲なども云それしの

の〆ハトニ在テ字ヲ絶ヘ結ヒ餘リヲ延ルニ
ヨリ猶云ノ意有ヘし 如亀ト云ハ小也
ニ入へし 乱曲ト云ハ四季ノ事合ニハ
ハ之又四季ノ委之分ニテ別ニ書ニ
申ニ出サス字ヲ以テ聲ヲ添テ出ル
一 寒天炎天ト云ヿ是ハ字ヲ初之事ニ云ヘシ
説云トスル天天ン上ト二ノ浦トス 出去其恐奏日ニ有

一 韋有ノ初ハ四十余流ノ口傳ト云ヿ有リ無
別ハ凡字ノ小ニ上ル凡字ノ大ナルヘし
リハ村上ノ松ヘし口傳又別之
一 五ツ拍子ト云ハ打ヲ上ト略ス拍子之色有
拍子之 一ロニ三拍子之 節長浦ニ有リ
一 八拍子是も有リ[illegible]ヘし拍子ニ入リ之
●二●二●二 是之
四拍子云々

哥云　ハツ折ノ三ツハ本折四ツめのこす
六ツめのあるのこり本折り
和哥の差別ハ木ノ下ニ取シハ三ツ目ヨリ也
又次ノ三ツ目ニ梅ノ下ニ出シ又次ノ三ツ目ニ
又ノ字出シてゆりかけてはノ二めノ下ニ
ヨノ字ニすゆへし
一 南ト入ト云ハ　折ト折ト
南ト云ト詞ト

さし上　内ニと詞ぬきすへし
一 七めの折ニ下ト云て
枕ことはへしかき
取ま南のうつり物まきに
南の折りうつへし
● 花し
○ うかふき
● うつし
○ 中
● ちらし
○ とりし
● をくりし
一 一調 二機 三拍ト云ハ先 初メニも調子

耳ニ入テ宇気ニ當テ同シ心ニ而息ヲ

入テ口ヨリ声ヲ出ス也是ヲ出ス時ハ調子高ク可

一 くりつけト云ハかりうシ咽ニ出シ腹ヨリ

とくといふハ胸ヨリ出テ息ヲ出スト云

高キニ出スへからず

一 かつつふニ文つりつて声あり 其ニ

わかめのそのはりひてからへ

ソそすの声よつらわやせん事ニある

胸ニの抱手すとうそうひて舞の口をく

すくれくうふへしト云心をうる時

ちんこうふへし 又

前ニおつきうきうぬ抱をつうふ

しふくをゆるすへからず

一 口舌の事 曲ト云ハ 口舌よくおけ心の

きこゆるをいふ之山三つ次テハ曲の
出るハ強ソラく聲合して口舌く
叶ド云トモ弐ハ大ニ律ぬニおゐてす
或ハ三んくすとあるをいふとそうしふハ
鳴りの洞子シそしき文の節構ゆく
ともに六律ぬニ似合たる洞子文割の
洞子あるへし甲しかれハ何と言曲の調

白しも云曲あわりすも能く候
思きりす事ニ之

一 呂律ノ事　一 越 双調なハ呂旋云之
平調 盤渉ハ律 黄鐘之黄鐘ハ呂
律ニ呂律ト混合ノ洞子トなシ云之
さのこり旋云ニモ延なも用ゆ之

一 宮の声之 商ハソル 角の太クム 徴の

五ル羽ハ〃ル

一ト〻
丁〻
平〻
勝〻
ト〻

宮商角徴羽
商
徴
一平双黄四
丁勝ル亦神
平ト黄盤上
斗双亦神一
トル四上丁

双〻
息〻
黄〻
斗〻
四〻
神〻
上〻

双廿神一平
ル亦上丁斗
廿四一平ト
亦神丁斗双
四上平トル
神一斗双黄
上丁トル亦

一 呂律ノ吟

宮ノ位なり是ハ天下にの音色なるなり
まて命なるへく商なれハ国もお
さゆる時ハ色の角ら出れハ松と
ことの色の徴ハようつま松之事
もふ羽の取のものこのへ
ちよあるへし

一 墨ノ洞子　木火土金水
春夏土秋冬
右性同之　双廿一平四
一 青ノ洞子同時も同之
四平二寿三卜四双右九六廿
七京八四九孫十上土二土行
一 新宅ノ洞子ハ一越之黄鐘ニ仏
一 舟ノ洞子ハ四之苦艘ハ件ハ右洞同前之

一 婦人よめ入ハ黄之文可有之

右此一札活翻世宗旨承経に相伝
秘事不替一字写之者也
秋田平十郎
天正拾五年九月日 （花押）

能楽研究所

一かく所ゆかる事

一おくし事

一さんの事

一口とかくとある事ゝすりまても口を絵

一弓のうす

一跡の事

一拍子の数

一方々あへの事

一雨こきやう

一弓上の口入の事

一源太かいかりとてもあかへきう

一太刀のかきやう

一さんの事

一太刀しさまへ入らの者しさまへ入か海きう

一弓矢のえあかつい馬上の廻るとること

かゝりてしつと雨まよふのやうにゆき
一 そよぐ面かゝ揚くまよふへしそれと
同事也
一 うのちらぬれもとゝのかうし

目録　二番

弐 二ふの組一段之後　八 う柳子ニ志

らのやうみてりニ柳子のかの事らき
弐 ひとさのうち あるの志かむしのうち面のへ
三 ?こう 一段ゝかうく 松風
あうひの上同 弐 あまゆきの一段ゝ八きさ
すして返うとあゐ一せ返 口のうち
の事 八 人の志ありつゝみすとうつき
かう付の地れいりや 弐 出前ありみて

ちひろいうやうの事　一　惣てちゝに
夫人のうへきかてハたゝの也　一　実字を
思ふへし　一　ミさ[illegible]もしろをきくへし
一　ちのうちの本へ移ること　一　文の
うつりよくうつくしきの事　一　花鳥風月
恋慕哀傷幽玄祝言とく述懐分
事　一　分のやうにうたふ事　一　拍子

の好み事　一　拍子ろくろうする　一　指拍
無拍子　一　八拍子　一　早拍子をはかりうたふ
事　いやしの三よふつあいうちを
声のあつかひ　一　声一寸二寸のうち　一　うけ
打拍　いきのあたへたの事のうち
一　皮肉骨の事　拍子　文字ニあり
文字にもあり　一　書曲のしらへてゝの茶

とらへかなつてとらへ時分の呂をとる
てよく伺ひきて声の花香のあやをよ
うけたまはりわきまへ声もちゝかうてあそ
志かるべからずと云ことに次
うたひのこゝとしてうたひつらぬる
からもて歌舞の二道ハ能をなす本
稽古なり

一 拍子二つ半八十八ヶ事　秘
一 信曲物ゝ事　能く附　表
一 うしろこの信曲物ゝ事　秘
一 拍子一二三ツの事

一 能にも書画にもうとき事 ありさ
事ぞれもわり扱の事
一 中にあらす事にふる事
一 人前もしらぬ事を聞て見てもちらす是
中には理也
一 能にも書画にもすく事并一服
御事 よろしかり候事 すゝめ

古事好む事
一 書画よりおもう能く事
一 酒を毒の事
一 酒を人にしいる御事
一 能にあまりの事
一 女能に将衣にさす鬼にまやなまえり
こらへて将衣にさぬ事

一 これの能なく扇のことくなるはすき

一 面ゝ続しらよさう拍し続太りの続

御みるへにさ事あせよさうに拍也

二曲三輪ノ事 セヘ 去而ノ 外并一番之

一 六ゝ日紀一

一 序

一 上口下口之口大事

一 （本ノ）先学ノ様見テノ事

一 物をまね事二反

一 四方天地ちうへさ渡事

一 拍ニワサシニナフ事エワノ事下ヒ字ルコト

一 女ゝ能一大事なる事

一 せうの能大事なる事

一 鬼ゝ能大事 ナルコト

一 物投之事

一 男舞之事

一 (秘) 扇とり之大事

一 コニカニカキタル能又大カリニカキタル能之事

一 謡能ハ謡能コトクスル事

一 貴人ノ御前ニテ俄ニサセラルゝ能ノタテノ事

一 (秘) 神之乱事

一 罷カリ入庭ノ本十ト用ニ立ル事

一 (秘) 舞ノタイハイ次第ノ事

ノ舞ノ事

五臈

毛端私珍抄

目録　鼻々事　鬚毛事

髪ゆひやう　鬘の事　同癖　丸頭

事　同二曲三曲之事　癖のくし

う　洗髪　髪の事　髭事

眉毛之事　立髪之事　かみのけや

う　髪の　髪へのつけやう　くしさしを

のけやう　大男同女の立やう　院方

やう　垂りて剃りつての場のやう

櫛のさしやう　結り櫛の事　てこそ

元服事　烏帽子　ふところ紙のやうし

前髪の事　櫛のやう冬毛　長髪

後見　又ま衣　鬼の事　獅子の事

少年の事　少々の似やうの事

一 ゆこうのふいらかてよろの事　一 先方角とも
御事　一 書しゆと守ようの事　一 武者
かてけかの事ミうへし　一 呪かに細への
能し事　稲植のうへのミ人うちちゆとあさ
らしきやうに志まつへかい同事并
一 賊将の能ようミろの事　一 治ちし能事
馬上河し　一 人のきしさの儀かの能く志めう

一 きしめの舞　一 面しきやう　一 勇人のみちゆう
一 天女の舞　一 若舞　神舞　世々の舞
一 男舞　かいうゆ　一 柳そし吉のかいうゆ
一 地うたいの能　一 人の能いそうら　一 けいこ
いの人の能くいそうり　同をして当町かの事
一 腰をいそうり守る御事　一 扇のかのもの
ちやうしかきやう　一 大口の事　みの人衣

名りそ候さ事　一神のとかめの事　一そ
らの前後の事　同達してそらり　一法の
はさやう　一勝かちの方角とさす
事　一風吹の廊のとやう神の名
やう　一物までふりくの事　一堂
つの事なく　一勝不前と後との二つの穴
利の　一地まりのかたの走やう　字をかゝす地か

左りてまゐりのかりめ　一はらめか
つのあきやう　一たいの板にちかいつかす
一人風かてつめきりして左の谷へ
いやさんあさんせい　一あくしきをもろ
よかゝす　一手紙かて言をしんえ
せい　一端法みかして事をかし　一忌
あらそてを　一まくしりてとのそゝす

一場よりたちぬきて左まく手組へ
御手あるへし 一芝居をもとむ
ハと 一扇つかハそしきとそぬる也 一
とす 一袖かけとも 一ものあけや 一懐
にかのぶとやうありや 一さてハく
かてさてめかてかてそうかうりや 一ゆ
またハまたのたくみてハなしくなる也

一大二ハ風さそれとさとろのや之座敷也
今のやうかる也
毛端 松拾枡
目録 四 葉
一手本よりまちのよみハ行かれもも国女
書とも紙かるへし一ハかりしまけ候同

みかなり脇ハ恋のくなりてまた
まるす 一 つらて脇ニくるなりくさり
くさりと云れハえんかよなりていやくみ
られと龍結よりくりくる世ねたり
かの事也人のきしまへもいつらハそ
ぬかりかの心付よりる也何事も
さもしくもあへしからさくきかる也

ふくくこしく脇ととる事ありてく
一 いるさんの脇ハ前句をけそうる句し
それも心付くハかるるわけ也 一 発句のさや
う 一 昔の心ゆかり 一 大口の出しく 一 章
甚しくゆゑあつきハかるしきもの也
是つうきわけ也 一 ちらしの心しやし 一 或
ちらし 一 ちらし静なそこらへの事 一 是ある

かく　一まくらやうの事　一いねさりから
の事　一のへまへはなしさらに
のこし事　一さしまへ　一こえかくる
事　一人の耳よりあまりよりの事と
よそにおはあり　一調　二様　三字の事
一様より初の文字　一初の句はなくて　一つゞき
とゞまりて先の事　一にあけ句の事

但一句のうち　一切ふかいひとつ続事
一三字つゝやう　一二字つゝ　一三ぢおち　横竪
一まへの乙の事　一うけるし　一うたのあま
うてぬきのあの事　一その句のつけられぬ
文字　一やうかりし　一おなし字まさりかりし
の事　一おなし文字乙よりの事　一いての
つかやう　一いとかなをみてはく事

これとしこる字事

目録喜曲

毛端私鈔抄

一云ゝ目録条ゝ

一 喜曲　五音　口ゝ開

哀傷　吟　分らり　綱子　横ゝ事

老人ゝ法爾　人のさゝ壽　くらり舟父

人の　きしきふらる事　人のけりと芝

ぬ事　きいの前後　舟をうらいの事

外ゝの知るの心　きしうま三　さしこと

公之れ　人ゝさのうらわ　らくるのひやし

堀ふよらるのつうや　閑雲らる事

見不　袴をや喜曲　さりもかうらい

口よりおかるゝし こゑのつゝやう そのこゑ
分かるゝ四聲のかうりめ 切字 句 分の
こゑ 人ミそしめやう 拍子の表く
ほくるく 調子とゝのえてよき所 かへ
かへの調子うけとる事

從風自筆ニウツス也

金春八郎
大夫安照

金春家所出於秦河勝歷
代秘曲傳家督一人而其他庶
子傍孫遂不能窺闚奧於
萬一矣雖然如是兄七郎
氏勝不幸而早世故於又家
傳之秘奧相續而欲傳之
子々孫々而以殘萬世悉家
傳秘曲教授於我所令相
傳也今又汝家傳秘曲不
遺所令教授也 莫令斷

絶笑

明暦二年丙申

三月廿一日

金森八左衛門

六十九歳

金森七右衛門殿 参

宅ともうる八拍子に字あまりくと出
うかゝひつねにゝに入すゝれ
あまりて拍子のつてとらしうしも
是ハりとさこ拍かゝれをり出座 平
本名出返生かるむ生屋をのまをの字
なり 是もれハ拍子を祈に日あつて言
を用に加へすなり 命節ハ小なかれも

なかもつなてとつしおきむかくへ二
ときに性根を入て信に云むへし花
命なへし月のけなふの岩清水祝
さうぬちうい目けふを云むきさる迄
二 かゝりの事 おもそかゝらハ謡吟の頃
治かりあの高所より平地に落る
かうくるの流れし見吟のなかるゝをみる

やうに節を付たりと心得てかくべし
序破の分かちも節のありさまなり
ふしは形木、幽玄ハ曲の懸りなるべし
されば節ハ只曲のすぢなり。すぢ
幽玄ハ上果なるをかゝりとも風姿とも云
し。節ハいふごとくにして詠吟
なりさがりを本字のかゝりにて知るべし

節ハ用なり、声ハ体なり。されバこそ呂律
呂とこそいふ。律呂のあはひにて中曲ハ眼とな
曲節ハおもしろきなり。今もおもしろくして思ふ音
の詠吟のさかりのまゝに喜曲のあり
右云
とぬべし。深中高し
かのくちびるの歯の舌の喉よ
鳴ハ小声をしりて思ふ

一
是ハ高砂として音曲のかゝりと云也
一文字ハ半ぬき字・息字・吟字
ぬき字ハぬすむ字也字とい
いはしれぬ拍子におもふところを文
字一ぬすめハ拍子ちかひて曲蔵とも申
まなこのかなに似れとも字ハ
二字三字ともあまりてぬすむ也

ことわりハくしらすして拍子にあはすれ
せうなまりて大事にかゝはる事なり
山あつし頃もあの松とつれは高砂
連親まち人よりのそとつれとつきから
海のその字をぬきみて文字なり
うおりしかくさこ拍子也是ハ声曲
とう知らく字ハやすうりつきと申すし

長曲のところとりかへつゝきとよみすへし文字
是又秘事也長曲のうちにはまりすへきかなを
字あり此字にて息をつくへしその字あり
又は同し数をこえておつるもこゑにつゝき息
かさこへ絶よりしらすよりふかくきに息
のこゑとかうのあとにこゑとききりあけてそ
はおはしまして長曲かりこのうちよみて

きりしぬれは後のこの字つゝ思の後に
この字のりのいれ字ありきこのこゑとの
これ字ありのかゝりよりて後れ字
みても中すなれはり是を息字とつゝ作
事し文書を見る字ありてこゑとこと
つてとまみむめもらをあれはかさ
くけこおの文書の御言を清ける

むら雨也是しも杉の柳やわりこの字
けふの松やなのあらしやのひゞき聞えい
ひゞきはゆづりてつらねあといふすやり
とおきめてそのあかしらりそこのとなえ
おもしろくきこ聞えりめでたき字に似たれと
ものまた字は頼みを行きに時のもの有
あるすもあり是は其道のひゞき通ずれは

その字をもつゞけれども去字あらはにくむへき
めでたき字の大かたの物がたりに書物通之
らはなへし源氏のうりとふも古言
のすくなり古言といふも古きことは也
喜悦を以て深く稀れにして書人
ならひとの初心の書みてこそくらのうぶも
うつくしくなし能く入れは延ていかなる書人

ちとこの方ハ一字とハまさ不書とうちかし一
字かくとおもくいのてまさとその字みて
の(合)ちむかりこころ三門海とふ
一字てとろはこみよいぬの字のち
とひろてうくいみえし金字ハ口開かう
ひちきえの人とあきまさかとみえける字
そちうとあちてうなくうみしちん

きくみてりふ字とろひのまさかく合力
ふれと(合)してさしかくきうかかり
さりよえ(前)くときころぬ(事)かりいよ
はるもひししれうち(前)みといふ
てかいしらよ一(歌)わつさしのとの字かちひ
海みえうきくとりふつきて(呉)右かく
合(書)かくしてちがりはししさ(延)

所なるは也それゝの氣字あるところ
ところあらはるへきといきのくはしきかな
もつる也うるはしき声大きにとものあり
いきハ息の継の所なれどもその字より
つゝけてはさうれなる也

一 息ノ事 惣して曲のいきつかれハ等
別りのあはれはゆゑある短曲無道

の氣人におほきくまとへて大きき声をたつる
ぶ給はゞこゝろ息あり。さうして玉をはらむ
かいうのとうし曲の一段くるへしらんことみ
歌 出字をハ出息にていふ二段のいひあそぶる
入の字をハ入息にていふべし生字より入
息の用ありそれハ短息にありて曲
余分あり短曲など一段ときりて後段に

うたとうたふ句をはなれてつゞきたるは
きこえぬ所もあり句をはなれてきこゆるも
声とめずうてうす所もあり呂
律呂とはうたへどもはじめは調子をふ
くみて五音をかぞへ呂のかはりをさす
ものなり心ある人は調子をふくむは律の息
せ文字はあさき字をはうたはねども

なり文字うたふところあれ文字にかはり
もなく文いのちみじかきにそのひきさ
むかし孫さまに調子をうたひはやき
うた所律の息にあさきまじはればあらはし
はじめもなくて国ふのうたはれたし
宮商角徴羽の五音位高下なきに
きこ雅よりしは五音つゞきは五音の少し句を

こゝにすして字しらを出来よりふきハめ
さらに下の位なりたゝハつされぬ事也
風波の難をうすけ嶋しハおりうかり
しかるみなりうちまかせて入集とい
ふ字てし文字にていきをつくにいす
是句のこゝれにてハうて出字の位を
いうきあるへくぬといふうへし

此体に似たれハなれかしさる也
一 相子に事是ハ歌のつゝき此家にむま
御くものさかく相子ハ志かものへされ
とも御さ御事なり志かそるとそ
おもくなりかくとやけやくなり
初よ并の事又お流御紀れあの事と
もあり是とうい紀并りさう終きうハ

つゞみたうく〳〵てう流ハ聞し とくとう
浅い稀し一段くの曲を定つるかなや
いふへしありさハたれごとありて
たてりきうはかし聞わたれは番和
といふもを作よりそ流ことつこの
うち地にてをふかくらつ座しつきそ
つ中ふかしてまを聞しらつハ定りさ

かり也して音曲舞の拍子はみなへ此の
わかるし音曲を稀にして拍子のちらぬ
をハ用ゐりとも知このちらぬはこ太鼓
其の藝人ハ拍子を本にならそ拍くと知
ハ舞にハ入る也拍子の役人ハ舞ハ音
曲を本とす舞ハ音曲の役人ハ拍子
をせんとするやしめて此をも由候ふして芸

別同心の曲折にて八あるへしそれもなりとも
拍子八八拍子なり古拍子定あへの拍子
定りなきなり古拍子ここ定とあ
への拍子はなりあへのひとしくて続
御本拍子の定也小拍子当ハ大拍
也ハ二拍子也ハ二拍子と名目すあへ
の拍子ことハこう揃拍子当ハ一拍子也ハ

八拍子と上ハ八拍子也この八拍子の名目
乱拍子こや拍子なハ一人曲拍子と号ハ拍子
の内也曲也曲大鼓流とまた之拍子さう
大和の拍子なり南流とてなりまて続れ
拍子別にて之拍子ハ序破急を
序ハ三隠破ハ三隠急ハ一隠よさくかや
とりされハ破の形うきて舞方とこも

らしきりきこえとおほくの人なかハ急なれ
ハおとさかりのいかまろしくてとゆる
こころきこえて声へしあてきこえるや
總ふれハこさうなかねあてをふ知なり各
らハ能いさくの序也吉れさかりハ破
急ハ急にちかくとなるへくを急と
おもへし次きこうハすこやかなるへきさ

うしろの急きかり大きと拍子のみ称なきな
ゆへし早方さそう元ねおす拍子あり西流
ふもおすの称あり是おハ皆と得あるへし
鼓にあくへのひやし同之
変之雅拍子を知筆抱之

一 四聲之事

平 上 去 入 の四云なり去入皆ハ下の
このむこころなり快その心し表分代
のまくあるみちともあふ心その字なり

ものまりあつき性ともちすうりもちすハ文
性なりもちすうもあつされとハつくあるを
性また文ありかうら西路れとくすの性を総
なり

一 琴懸之事 是ハ横竪ニよりに云ここゟ
を竪よりハ竪よりなるさあるを横よりふ
かうわし律をハ竪よりハ呂をハ横より呂

五さゝ文おもとてあり是ハ横竪是の
比叡之下きせて色まのをハ横よりいてその
うら曲となりて竪の曲根もあるへし
まそうふのうふ てもおもなふおもすふ
為しかれうり曲よえてうハ竪ふもおも
是横ふもうろへし呂律横竪をのみそ
ころへし

一 二字一曲の秘傳あり是ハ呂律あり此曲（甘節拍）
當流よおいてとりわきこゝろえあり大
こと二字を一曲よふるふといふあり甘節
に似たれとも甘節ハ曲あるゆへ節
あり是ハ秘事よならねてある節之
あらい人の云来あり やかれともされ
されハ節かりよさハ在をさす事なり

さりしハされハみちの紀也よ知ありる是
にしてて秘事を伝へおこなれ在所をも思ハお
しまさに伝え取人なり先祖も併思ふ
伝もなくしを秘やの伝と知る志の
ありしの二文字ありてよりしよ紀をふを
よもやうよふるへし努ハ一に心得
也あるへ 釣針のしるく云へし

一 無味智ある事 無味に付ての本道

人は五味の好味あり からきをこのむも
あり あまきをこのむあり すきをこの
むあり にがくしぶくの好物のありとも
あり 此の味と云ふの本来一水より
至味 又しきし 海ならあり 無
これは香りて 好味を知るふへし 加

本来無味のありといふを知る 無味にも色
一味に定まることあれば さらにふたの
あり 好有あり 同じからず 次水はかとふ
を無味 縁味にして 定せずして流
人の口より物ふまへしもの 人のこころ
よりて 又無味を渡しうる事 本水の
道なかひにふかれた文味を知る事

ちゝ海の如くならん庵をかへしさう
程に空せずして面白き感味にかなう
なり。妙なる風味音曲の秘味もそのまゝ
ことに定せられ、水の如くなれによくふとて
つゝ。花は幹味をもつて一水の徳をそなふ
此事めでたき水はいつはりて三方圓
のかたちをなすは味のあらはれとかす

人のこれ之能の術よりて術味の感を
なさしむるにあらはれてすなはち一水を
見皮肉骨の三曲とあらはれは山河大地を
非常の木一切世上は水術なり。寿は六
輪一露と云歌道の一巻を作る事は
水輪の形なり。一露はすなはち一本也
妙利劍勢骨に紀をうくるは三曲なり

およハ入事なしとうれしとうなかハ氷
ハ取りてとりて稀なり無味とりてハ
のうとす音曲ハ吟詠くられとなりけれと
しかもせさうと無味とす常ハ序破
急まうはらくかう緑よろつと取ふれ
かうすもしさせさうと無味とす皆ん
かくし氷かくて又見かうんとなきてゐて

ちうしを銀せハちうしも又とう滴の事
引ハ應無所住而生其心也可秘く
穴賢く又堅莫傳し

一 此一水　稽古の入門より初心より
の位もそれハ一水の味と同し
又其藝能も一水の滋味なりとて

の縁よのかりぬれハ禅味一なとゆゑ
竟則流通自在になれハ于時も撲に
庭し好にさふ也にもあらハを
して茶の湯の茶味をうつり
先夫 諸味一味とかけさこ
一休居士年来の枕首也とて向き都
来し茶たて果ものかりハあふら

かくへきかれとも連者にまうさかれ
猶をふすれおほしす急にあり候
かりて闇曲の今にあり半あへし竟
ハ行しあらかのなかなかり上て位あらく
きわと思ふ所に上代唐物の絵と
のさらのふしすそに茶の後し如れ
ともすくうにおきてもわりさ所の

らすあるものなれとも眼精を開ところえ
なぬよりてまりさ示ところなり
有へし花よそれは付てもれて闕所
のわざやうなふいふもくいし也へ
し花ハ大かた当場の様に通してをとな
く見ようりふりまうて所よあるへし無
への風ハ上の位なりそれハ別の事

世々つゞきてもおもひれ心の事也ともかく
有し花則明曲にしてなさての至
もなき月のことくあるへし妙花の浮
ひまらけぢるしるると云とも月花
見ハさいはとあるへきすかたハ曲折す
うし常なく風折急よありともハ両
よあるハあまり妙なる月のことくなる時

小哥ハ總のうたひ出しハ人さなり京縁と
なり事ともあるへし然て周所曲
の分ちを考へし喜曲ふし清曲渇曲
此あるへし
一 程拍子と事一方事かとあり云かさ
なりとやしとりすのハちハさきと
天地未分ハなとなり開闢ハとやし

なり一萬はかとあり[?]あうら所あるへし
又かうの間よりやしあり拍子のうるよ
かとあの事を云和事と所和ニ[?]
丈ち殊さところのあるら面白さあるへし
されて是かとるよ性ニあるへしあるへしあ
ハ男ちるへしされ正直を性ニし慈悲
をふちし天地を父母とする心を泰

平なり万道にわたりて為し　又
弱道の仏に二仏の二ツの様にて志るべし
て法をよく手覚えありて人によらん
こそすゑの世まで似ずして来べき事真
偏一筋の法なるべし

此一指不破道之奥義秘之

中之秘也無心合身事常
住不職之妙範を一動万無
ニ持せる千者成べし一秘之

長禄六年十月十二日
金吾　竹田異本斎

金春八郎
秦安照（花押）

金春家所出於秦河勝歷代
秘曲傳家督一人ニ而其他庶子
儕孫遂ニ不能窺閫奥於萬
一モ矣雖然如是兄七郎氏勝
不幸早世故老父家傳之秘

奥相續而欲傳之子〻孫〻而
汝張萬世悉家傳秘曲教授
於我〻所令相傳也今又汝家傳
秘曲不遺所令教授也莫令
斷絶矣

明暦二年 丙申
三月五日
竹田金春八郎
大宗安喜（花押）
六稽九家
金春七郎殿
参

八·5
能研
2151

音律菁華集

八.5

能研
2156